Akita University

求められる保育者の専門性と大学における保育者養成†
－保育者志望学生の意識と養成教育の役割－

奥山　順子・山名　裕子*
秋田大学教育文化学部

本論は，保育者の専門性に関する今日的課題に対して，今後の保育者養成のあり方，保育者志望学生の意識から考察することを目的とするものである．特に，近年その重要性が認識されるようになった4年制大学における保育者（幼稚園教諭・保育士）養成の役割を考察した．従来，保育者養成教育においても保育者志望者の要求にも，保育スキルの獲得を中心とする傾向が見られた．また，近年の学生の意識には，就職を意識しての資格取得欲求が強くみられる．

それに対して，今後の専門性育成のためには，学生段階，初任者段階の実技志向傾向を「知的行為」としての保育へと成長させる力を育成することが必要であり，特に，主体的に幼児や保育の課題に対峙し，自ら考えていく姿勢を育てること重要であるととらえられた．また幼児教育施設が多様化している現代，地域独自の課題を理解し，幼児教育の社会的位置づけなど，幼広い関心をもって考えることも，これからの保育者の専門性として重要である．

キーワード：幼児教育，保育者の専門性，大学における保育者養成，知的行為

1.　はじめに　～研究の目的

日本の幼児教育は明治以降一貫して，就学前教育としての幼稚園と，託児・養護を主目的とする多様な施設とによって実施されてきた．戦後は，制度の二元化への問題がたびたび指摘されながらも，今日まで幼稚園・保育所という目的を異にする二つの施設によって担われてきた．近年，幼児教育・保育に対するニーズの多様化に伴い，幼児教育・保育施設のあり方は従来の枠組みを超えて多様化し，制度の見直しが急速に進められている．

幼稚園と保育所の一体的経営，総合施設，企業による保育所経営などにみられる施設の変化に加え，長時間保育，保護者支援の役割の増大，幼稚園における満三歳児・二歳児就園という低年齢児保育など，幼児教育の目的自体も大きく変化している．

幼児教育・保育へのニーズの多様性は，一方では長時間保育や一時保育などの託児的保育や，従来は家庭で担っていた保育の施設への委託傾向，保育期間の長期間化，また保護者の就業形態の多様化に伴う保育時間や形態の多様化など，保育の目的や施設の形態の多様性となって現れている．他方で保護者の意識には，早期からの特定の知識や技能の習得を目指す，いわゆる早期教育的ニーズから，生活習慣の形成をはじめとする家庭育児の外部委託傾向など，保育内容に対するニーズの多様化という側面も認められる．

こうした近年の幼児教育に対しては，保育者の専門性の向上が重要課題としてとらえられている．中央教育審議会答申（2005）「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－」においては，幼児教育充実のための具体的方策のひとつとして，幼稚園教員の資質および専門性の向上が挙げられ，養成段階からの専門性向上のための方

2006年1月23日受理
† The Desirable of Specialization of Nursery School and Kindergarten Teachers, and the Training for Kindergarten Teacher at University
* Junko OKUYAMA and Yuko YAMANA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

策と，保育所・小学校との交流による幼稚園教育の見直しや専門性の質的変化の必要性が述べられている．また，幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために－」(2002) では，必要とされる幼稚園教員の専門性が8項目にわたって述べられている．それは，幼児理解と保育に関する基盤的専門性から，障害のある幼児への対応，幼稚園が地域の幼児教育のセンター的役割を果たすための専門性，小学校・保育所等他機関との連携・交流のための企画・実践力，人権意識など幅広い．

保育者養成において，こうした幼児教育施設の変化，また求められる専門性の変化への対応が必要とされることはいうまでもないが，近年の若年保育者に対しては，自らの生育過程において乳幼児とのかかわりを含めた，豊かな生活経験や自然体験などの不足が指摘され，保育の基本的な専門性の育成の面でも困難な問題がある．

本論は，上記のような保育者の専門性に関する今日的課題に対して，今後の保育者養成のあり方について，保育者志望学生の意識から考察することを目的とするものである．特に，近年その重要性が認識されるようになった4年制大学における保育者（幼稚園教諭・保育士）養成の役割を考察し，その方策を探るための第一次の研究と位置づけるものである．

2. 日本の幼児教育における保育者の専門性

今後の幼児教育に対しては多様な専門性，より高い専門性が求められているが，日本の幼児教育・保育施設や保育者養成機関においてはこれまで，保育者が高い専門性を要する専門職として認め，育成されてきたとは言いがたい．保育者の専門性は，第一義的には，集団施設教育の場における幼児期の発達を保障する力，すなわち，適切な幼児理解，発達理解に支えられた保育の計画・実践・評価をする力である．それは，教育と養護の一体化という幼児期の教育特有の「保育」の理解を基盤とするものである．

では，これまでその幼稚園教育における保育と保育者の役割，求められる専門性はどのように考えられてきたのであろうか．日本の幼児教育が多様な系譜をたどって成立，発展したことと関連して，保育者の専門性や求められる資質もまたその歴史の中で多様な側面を見せてきた．ここでは，幼稚園を中心として，保育者の専門性の歴史的背景から，保育者の役割や専門性にかかわる問題を明らかにしたい．

保育者の専門性の問題として第一には，女性の仕事としての保育における母性の強調が挙げられる．戦前までの国の規定では，幼稚園の保育者は女性であると規定されていた．託児所と同様に「保姆」と称されていた幼稚園の保育者は，特に草創期には，未婚女性の結婚前の修養として位置づけられるなど，教育の内容は学校教育的な内容でありながら，保育者には母親的性格が求められていた[1]．

母性の強調には，日本の幼稚園教育の創始期から信奉されていたフレーベルの幼稚園教育における，母性的保育の強調の影響が考えられる．それには，日本の幼稚園および保育者養成で重要な役割を担ってきたキリスト教伝道や修道会において長期にわたってキリスト教思想を基盤とするフレーベル主義が重要視されてきたことの影響も少なくない[2]．

また，女性の就業の社会的位置づけも，保育における母性の強調にかかわる問題である．女性が職業をもって生きることが社会で適正に認められていなかった時代には，「女性ならではの職業」として保育者を位置づけることが必要であったのではなかろうか．保育者自身が，女性にしかできない仕事として母性的保育を追求することが，社会的に女性の就業が受け入れられなかった時代の，保育者としてのアイデンティティ形成につながったとも考えられよう[3]．

保育者の専門性における問題の第二は，実技中心の傾向，特に具体的な技能の獲得を重視する傾向である．幼稚園の保育内容は，現行幼稚園教育要領と異なり，昭和期までは教科的な「保育項目」や，「望ましい経験や活動」など，具体的な活動が配列されていた．特に唱歌や遊戯は初期から重要な位置づけがなされていた．これらは，保育者自身の生育歴・教育過程で経験のないことでもあり，実技研修としてスキルの獲得が特に重視されたことである．

特に大正初期から実施された，文部省による全国規模の保育研修会では，毎回，唱歌と遊戯，特に当時流行した律動遊戯の講習が日程の大部分を占めるなど，実技の研修が重視されていた．唱歌・遊戯などが，進歩的教育として，幼稚園教育のシンボル的存在として受け入れられた側面もある．

実技中心志向は，後述する養成過程での課題でもある．特に唱歌・遊戯は欧米からの移入による内容が多く，幼稚園教育開始以前の日本独自の文化には存在していなかったものである。そのため，外部か

Akita University

らも幼稚園の象徴的な保育内容として評価され，それに関する保育技能のみが幼児教育に特有の専門性として位置づいていったと考えられる．

第三の問題は，保育の目的が託児に矮小化され，保育者の専門性が軽視されたことである．日本の幼児教育は，一部富裕層・知識階級を中心とする特権階級的教育としてスタートしたが，幼児を対象とする教育や施設保育は，制度としての確立を待たずに多様な目的，形態や内容によって各地で開始されている．たとえば，貧困層を対象とする託児施設や養護的施設，また農村地域を中心とする季節託児所のような一時的な保育施設，女性支援を目的とする矯風会などの活動にみられる養護・保育施設，地域の子どもや青年組織による託児的活動など多様である．幼稚園の普及・設立が進まなかったことにもより，各地域の実情に応じてこれら多様な保育が開始されていった．ニーズに応じた多様な施設を同一地域内に設立することは困難であり，保育所等託児的施設と幼稚園は，地域による偏在が長期間にわたって続いた．したがって，それぞれの地域での幼児教育・保育施設の保育やその目的は，地域内の保育ニーズによって理解されていた側面がある．それは，幼稚園に対する養護・保育的期待，託児的期待や，保育所・託児施設に対する教育的期待でもあった．

この傾向は，保育者の専門性に，現在その重要性が理解されている養護と教育の統合という方向性を持たせたというプラスの結果をもたらしたと考えられる．しかしその一方では，幼児教育・保育施設全体を，託児的・子守的役割としか考えない傾向にもつながったといえよう．第一の問題として挙げた保育者の専門性に対する母性の強調とともに，専門職としての保育者の位置付けを低下させる要因となったと考えられる．

以上のように，これまでの保育者の専門性に関しては，母性の強調，特定の実技中心の傾向，託児・子守的役割の強調などの問題が認められる．これらの問題と幼稚園や保育者が置かれてきた社会的位置づけや，保育者養成教育は相互に大きな影響を及ぼしている．

幼稚園教育に対しては戦後の制度確立・幼稚園の普及期後においても，国や自治体の十分な施策および財政的支援はなされず，大部分が私立園によって担われてきた．そのこととともかかわり，保育者の処遇・雇用待遇は低く，保育者の多くは低賃金によって保育を担ってきたといえる．これによる保育内容や専門性の問題には二つの意味がある．一方では，待遇にかかわらない奉仕的・献身的な保育者の謙虚な姿勢が，幼児を尊重し，教育の中にも養護・保護的視線を向けた保育を確立させたことである．他方，低待遇が，専門性を高める意欲を保育者に育てず，保育を託児，子守的保育に矮小化させる要因ともなっている．

さて，私立中心の幼稚園教育が，保育者の専門性に及ぼしている影響には，専門性の第二の問題としてあげた実技志向とも関連して，経営のための園児確保を目的とする，「目に見える成果」への志向がある．これは戦後のベビーブーム，都市部における幼稚園普及・増設期，その後の園児減少期に特に多く見られた傾向である．近年の少子化および保育所ニーズの増加に伴う幼稚園の経営困難も同様の傾向の誘因となり，保護者の理解が得られやすい「目に見える成果」に直結する実技志向を助長している側面もある．

次に保育者養成教育における専門性育成の問題について考察しよう．日本における保育者養成は，明治期から設立された保姆養成所を母体とする短期大学を中心として担われてきた．保育者が女性の職業として位置づけられてきたことは，女性の高等教育に対するニーズとも関わり，1973年以降の国立大学への幼稚園教員養成課程の開設後も短期大学中心の傾向に変化は見られなかった[4]．

短期大学における保育者養成の多くは，2年間で幼稚園教諭二種免許状と保育士資格の両者の取得を可能とするものである．2年間で10週間以上の教育・保育実習を含むカリキュラムが編成されている．養成過程では，保育実践者としての即戦力的，実践的内容が必要であるが，本来はそれを支える理論との関連を学ぶことが必要とされよう．しかし，それは短期の養成教育では困難な課題でもある．その背景には，第一に上述のように幼児教育現場での実技重視の傾向，第二には，幼児教育・保育を対象とする保育学自体が十分に確立されてこなかった[5]問題も指摘できる．

このように，保育者の専門性に関しては幼児教育・保育施設の社会的位置づけ，女性の職業観，保育学の確立の問題，養成教育の問題などがその質的向上を阻んでいたととらえられる．従来の問題としてとらえられた母性的保育，実技スキル中心の養成教育

Akita University

や専門性意識，子守・託児的保育者役割から，今後は幼児期の発達を保障する計画的営みとしての保育を主体的に構築する力，そのための確かな発達観・幼児観と，それを実践と統合させる知的行為としての保育観を持つことが保育者として求められる資質であり，その専門性であるととらえられよう．

近年の幼稚園教育には，預かり保育，満三歳児の随時入園，さらに二歳時就園など，従来の三歳以上児を対象とした1日4時間を基本とする保育の中で構築されてきた専門性とは，質の異なる専門性が要求されている．また，子育て支援の役割，地域の幼児教育のセンター的役割など，保護者への対応に関する専門性も要求されている．幼保の一体的経営，総合施設化など，幼児教育の目的からの見直しも迫られている．そこでは，社会的動向への関心をもち，実践の場から問題を考え発信していく力も求められよう．

以上に述べた保育者の専門性に関する問題と今後求められる方向とをふまえ，筆者らがかかわる4年制大学における保育者養成教育のあり方を探るために，次に幼稚園教諭・保育士資格取得希望学生の保育観や保育者観をとらえ，課題を明らかにする．

3. 保育者志望学生の実情

保育者志望の学生の実情を，(1)幼稚園に対する学生のイメージ，(2)保育者の仕事に対するイメージ，(3)保育士資格に対する意識からとらえ，その保育観や保育者観，発達観を検討する．

(1) 幼稚園に対する学生のイメージ～体験の多様性による問題点

幼稚園教諭を目指している学生のイメージ画から，そこに現れている保育のイメージ，さらには保育者のイメージを検討した．そこから，幼稚園における保育者の役割に対する学生の意識を探った．

方法

対象者　「保育内容研究法」の受講生12名，「幼児教育指導法」受講生21名の計33名．

調査時期　2005年10月のそれぞれの授業を利用して行った．

手続き　受講生に対して「幼稚園のイメージを描いてください」と教示し，自由にイメージを描くよう指示した．また絵の上手い下手や，描いた内容が評価の対象でないことを伝えた．所要時間は約20分であった．

結果と考察

描かれた絵を次の5つに分類した．①遊具や「もの」とのかかわりが中心の場面のみを描いた絵，②幼児によって展開される自由な遊びをイメージしながら描いたと思われる絵，③保育者によって設定された活動が中心に描かれている絵，④保育者が「子守的な」役割をしているところを描いた絵，⑤その他，である（各カテゴリに分けられた絵の典型例は資料1から資料5を参照のこと）．さらにそれぞれの絵に「子ども同士のかかわり」が描かれているかどうかによっても分類し，その人数を算出した（表1）．

表1　幼稚園のイメージの分類とその人数

	子ども同士のかかわり		
	ある	なし	計
①遊具と「もの」とのかかわり	7	7	14
②自由な遊びのイメージ	12	0	12
③設定された活動のイメージ	1	2	3
④子守的保育のイメージ	1	0	1
⑤その他	3	0	3
計	24	9	33

「自由な遊び」を主体とした幼稚園を描いている学生は全員が子ども同士のかかわりも含めて表現していた（資料1）．他方，遊具や「もの」とのかかわりを中心に描いている学生は，遊具のみ，または遊具と1人の幼児など，子ども同士のかかわりを描いていない学生と，その遊具のまわりで，数名の子どもたちが遊んでいる絵を描いている者が半数ずつであった（資料2）．

また33名のうち，保育者を描いた者は3名であった．そのうちの1人は，幼児と手をつないでいる場面を描いている．絵としての表現力の問題もあろうが，幼稚園の保育の象徴的場面のイメージとしてこの場面を選択して描いたこと，幼児自身による遊びをうかがわせるものが描かれていないことなどから，保育者に対する「子守的」役割イメージがうかがわれる（資料4）．またその他のものには，保育者が用意した設定保育の場面や，折り紙を折ってあげている場面が描かれていた（資料3）．

学生の絵からは，現行幼稚園教育要領で幼稚園教育の基本として挙げられている，幼児が自発的に展開する遊びを中心とした保育，またそこにおける保育者の役割とは異なるイメージを持っている学生が

Akita University

多いことがわかる.

これらの絵には，学生自身の幼児期の体験と，学生が望む理想的な幼稚園像という，意味の異なるイメージが含まれていると考えられる．しかし，現実的姿，また「好ましい」幼稚園像のいずれも，以後の幼稚園・保育へのイメージとして，保育観形成に深くかかわるものであると考え，ここではその分析は行わずに，すべてを学生の幼稚園イメージとした．

学生の保育体験は，幼稚園・保育所の違い，在園期間の違い，私立を中心とした多様な保育内容・形態による保育と，ばらつきが大きい．これは他校種にはない特徴であり，保育者養成過程における保育観，保育者観形成上の大きな課題でもある．

(2) 保育の仕事に対するイメージ～中学生と大学生による保育士に関する自由記述からの分析

養成教育のあり方を探るために，幼稚園教員免許取得希望者の保育者の仕事についてのイメージを調査した．そのイメージの質的な検討を行うために，中学生に対する同様の調査との比較検討を行った．

中学生と大学生の双方に対する「保育者のいきがいは？」「保育者の苦労は？」という質問への回答から，どのような違いが見られるのかを探索的に検討した．

中学生は，秋田大学附属中学校の３年生１学級の2004年度総合学習における職業イメージの自由記述から整理．大学生は，2003～2005年度の幼児教育関連授業の初回に学生のイメージを把握するために行った調査によるものである．

結果と考察

保育者のいきがいに関する記述の比較　中学生と大学生の記述に大きな違いは見られなかった（表２参照）．どちらの記述にも共通して，母性的な保育観や，子どもと接する喜びなどが述べられていた．

保育者の苦労に関する記述の比較　いきがいに関する記述とは違い，保育者の苦労に関する記述ではその内容に，中学生と大学生の違いが見られ，大学生の記述が，より具体的な内容になっている（表６参照）．大学生は対象者全員が幼稚園教員免許取得希望者であるため，自分が保育者になっときに起こりうることを考えての回答であると思われる．その多くは幼児への接し方の技能にかかわるものであった．これは，前述の保育者の実技志向，また保育イメージともかかわるものである．

(3) 保育士資格に対する意識～実態調査

近年，保育者には幼稚園教員免許と保育士資格の併有が求められるようになっている．多くの学生が，保育士資格試験を受験し，資格取得を目指しているが，その中には幼児教育現場への就職希望者のみならず，他の動機やあいまいな理由での受験も見られた．筆者らの日常的な学生へのかかわりの中でも，資格に関する相談が学生の所属にかかわらずに見られる．そこでは，保育者への明確な希望，他校種への就職が困難であるという理由による資格取得希望，漠然とした理由と多様である．そこで，学生の資格取得を望む理由，また希望学生の数を把握するために調査を実施した．調査は進路についての目的意識が漠然としているものも多いと考えられる入学後間もない１年次学生と，教育実習を通して自身の進路とかかわらせて教職について考える機会を体験したと考えられる３年次学生とを対象とした．

方法

対象者　教員免許取得予定の１，２年次学生227名（学校教育課程101名，他課程126名）と，附属学校園（幼稚園，小学校，中学校）で実習中の３年次学生123名（学校教育課程79名，他課程44名；主に３，４年生）．

調査時期　１，２年生に対しては，2005年６月21日の「人間形成論ＩＡ，ＩＣ」の授業時間内に行った．３年生は，2005年９月の実習期間中に，附属学校園を通して，学生に記入させるよう依頼した．

質問紙の内容　大学での保育士資格取得希望の有無（１，２年生に対しては５件法で，実習後の学生に対しては４件法で尋ねている）とその理由，保育士資格に関しての自由記述など，大別して６項目からなる質問項目をA4版１枚に記した．

手続き　１，２年生に対しては，保育士資格あるいは大学での資格取得に対する意識調査であることを口頭で伝え，質問紙を配布した．３年生には実習中の附属学校園に保育士に関する調査であることを伝え，自習中の空き時間を利用して学生に回答させるよう依頼した．所要時間は約10分であった．

結果と考察

保育士資格の取得に関する意志とその理由　１，２年生の保育士取得希望者数を表３に，３年生の保育士取得希望者数を表４に示す．１，２年生の教職必修科目受講者のうち91名（40%），実習中の３年生61名（49%）が，大学で保育士資格の認定がなされ

Akita University

表2　保育者の生きがいと，保育者の苦労についての自由記述

(1)保育者の生きがいは？

中学校3年生	大学生
子どもとのふれあい	子どもと触れ合うこと
子どもと一緒にいられる	子どもと遊ぶこと
笑顔が見られる	子どもと自分の気持ちが通い合ったとき，保育者であってよかったと思うこと
子どもたちと遊べる	子どもが楽しそうだったり嬉しそうだったりしてくれること
子どもがますます好きになる	子どもが笑ってくれた時
かわいい	
子どもから学ぶことがある	子どもが成長していく様子に触れることができる
成長していくところが見られる	子どもの成長への手助けができること
子どもの考えが理解できること	見守っていくことができる
	子どもが一人でできなかったことができるようになった時
	子どもらしい感性や考え方に触れることができる
子どもの世話をすること	子どもから信頼され，好かれること
子どもに好かれ，感謝される	出会い
毎年新しい子どもに会える	大変な分やりがいがある
若い気分でいられる	
年賀状がもらえる	
他の先生と会話ができる	
自分が癒される	

(2)保育者の苦労は？

中学校3年生	大学生
子どもがいうことを聞かない	いうことを聞かない子
いうことを聞かないとストレスがたまる	けんか，トラブルへの対応
怪我をしたとき	子どもへの注意の仕方
	子ども同士の人間関係
一人ひとりの面倒をみるのが大変	たくさんの子どもへの目配り
うるさい	大人の予想できない行動への対応
育てるのが大変	コミュニケーションがうまくとれない（言葉の未熟な）子どもの気持ちを理解すること
	幼児の言葉を聞き取ること
	子どもにわかるように話しをすること
	基本的生活の教え方
	わからないことを質問されたとき
体力がいる	体力がいる．腰痛
親との考え方が違うと大変	保護者とのかかわり
自由な時間がない	いじめ
いい先生でないと嫌われる	

るならば「ぜひとりたい」「できればとりたい」と考えていることが示された．

次に保育士資格を「ぜひとりたい」「できればとりたい」と考えている学生に対して，取得したい理由を自由記述させ，その内容を以下のように4つに分類した（表5）．

「仕事イメージ」は，「子どもがかわいいから，好きだから」というイメージとしての心地よさについて書かれていたものを分類したものである．後述の保育士資格に関する自由記述にみられた「大変そう」などの記述も，仕事イメージに含まれる（表4で示すとおり，保育士になりたいとい積極的に思っている学生には「大変そう」という記述は見られなかった）．

Akita University

表3　1，2年生の保育士取得希望者の人数

		人数	ぜひとりたい	できれば とりたい	できれば とりたくない	とらない	よくわからない
学校教育課程	男	35	5 (14)	8 (23)	0	14 (40)	8 (23)
	女	66	17 (26)	22 (33)	3 (5)	20 (30)	4 (6)
	計	101	22 (22)	30 (30)	3 (3)	34 (34)	12 (12)
他課程	男	40	2 (5)	5 (13)	2 (5)	23 (58)	8 (20)
	女	86	7 (8)	25 (29)	1 (1)	44 (51)	9 (10)
	計	126	9 (7)	30 (24)	3 (2)	67 (53)	17 (13)
	合計	227	31 (14)	60 (26)	6 (3)	101 (44)	29 (13)

（　）内は百分率を示している．

表4　実習後の学生の保育士取得希望者の人数

		人数	とる	できるだけ とろうとする	とらない	よくわからない
学校教育課程	男	28	1 (4)	12 (43)	9 (32)	6 (21)
	女	51	16 (31)	12 (24)	14 (27)	9 (18)
	計	79	17 (22)	24 (30)	23 (29)	15 (19)
他課程	男	22	1 (5)	9 (41)	8 (36)	4 (18)
	女	22	1 (5)	9 (41)	8 (36)	4 (18)
	計	44	2 (5)	18 (41)	16 (36)	8 (18)
	合計	123	19 (15)	42 (34)	39 (32)	23 (19)

（　）内は百分率を示している．

表5　保育士資格を「ぜひとりたい」「できればとりたい」と答えた大学生人数とその理由

	1，2年生		実習後				
	学校教育課程	他課程	学校教育課程	他課程	1，2年生	実習後	合計
仕事イメージ	13 (24)	11 (28)	5 (12)	3 (15)	24 (26)	8 (13)	32 (21)
①イメージとしてのここちよさ	13	11	5	3	24	8	
資格志向	22 (40)	12 (31)	25 (61)	13 (65)	34 (36)	38 (62)	72 (46)
①幼稚園免許との併有	1	0	8	0	1	8	
②小学校免許への付加価値	0	0	1	0	0	1	
③不確かな動機	20	12	12	13	32	25	
④明確な動機	1	0	4	0	1	4	
興味・関心	10 (18)	8 (21)	6 (15)	2 (10)	18 (19)	8 (13)	26 (17)
①社会的動向	1	1	4	0	2	4	
②漠然とした興味・関心	9	7	2	2	16	4	
その他（無回答を含む）	10 (18)	8 (21)	5 (12)	2 (10)	18 (19)	7 (11)	25 (16)
適性（他者からの評価）	0	0	1	0	0	1	
無回答	10	8	4	2	18	6	
合計	55	39	41	20	94	61	155

（　）内は百分率を示している．

「資格志向」に分類された記述はさらに①幼稚園免許との併有，②小学校免許への付加価値，③不確かな動機，④明確な動機とに分けられた．①は「幼稚園免許と一緒に」取得する利点について述べており，②は「小学校の免許と一緒に」取得する利点について述べている．つまり保育士資格の単独取得ではなく，他の教員免許と「併せて」取得することに意味があると考えている．③については「取れるものなら取る」のように，保育士に積極的になろうとも思っておらず，大学で，それも少しの履修で資格

Akita University

表6　保育士資格および調査に関する自由記述

人数	1，2年生	人数	実習後
幼稚園免許との併有			
		5	幼稚園免許を取得予定でも，免除教科を認めて欲しい
			幼稚園教諭と一緒に免許・資格が取れるようにして欲しい
			幼保一体型となると，あるとより細やかに対応できる
			やはり，せっかく大学で勉強しているので，そのような過程の中で保育士の資格も取ることができれば良いなと願っています．
			子ども，特に幼児と関わる仕事がしたい人は，幼稚園教諭の資格も保育士資格も欲しい人が多いと思うので，保育士資格も取得できるようになればよいと思う
大学への要望			
9	秋田大学でも取得できるようになればいいと思う(2)	4	他の大学では取れるところがあるのに，なぜ秋田大学では取れないのか
	4大卒で保育士資格もとれれば嬉しい		大学で資格がとれると嬉しい
	人間環境課程からも保育士になりたいです		講義の中で対策をやって欲しい
	誰でも取得できるようにしてもらいたい		友達で自主的に取得しようとしている人がいるので，大学で取得できるようになると取得しようとする人も増えると思います
	保育士になりたい人も国公立大学にいけるのはすごい		
	自分は保育士資格を取りたいと思わないが，取りたいと考えている人がいるならとれるように何らかの対処をすべきだと思う		
	自分は取得する予定はありませんが，取得したい人も多いでしょうから，もっと多くの大学で取得できるようになればと思います		
	短大だけなどというのは，やっぱりおかしいと思う．大学でも資格がでたら，さらに保育士の能力などが高まるのではないないか．		
大変さへの言及			
4	大変な仕事だと思う(2)	2	資格をとりたいと思うが，とるのが大変そうな気がする(2)
	姉が保育士なのだが，試験の話を聞くと大変そうだった		
	名前以上にきつい仕事だと思う．目指す人はがんばってほしい		
わからない			
8	幼稚園教諭と保育士の違いがよくわからない(3)	2	資格についての知識がない
	保育士試験はどういったものなのか少し知りたいです		取得の仕方を教えて欲しい
	保育士に関する知識が乏しいので，機会があれば詳しくみてみたい		
	活かせる分野がよくわからないので説明を聞いてみたい		
	受験のために何か受けておかなければならない授業は必要かどうか		
	実際，取ろうと思っても，受験の案内などがどこにもないので，どうすればいいのかわからない		
イメージ			
		1	子ども好きがやればいいと思う
その他			
2	保育士資格は保育に携わる人には絶対に必要であり，人間形成に深く関わる仕事として人間性も育てる教育をして欲しいと思う	1	私は保育士の人が余っていると聞いたことがある．資格を取っても希望の職に就くことができなそうだ
	資格に関してではないが給料が安いということであきらめる人もいる．男も女も一生の職業としていけるように社会的に重視すべきだ		
感想			
2	自分は子どもに対してうまく相手ができないので，保育士の資格をもっている人はすごいと思う		
	小・中学校の免許と一緒に保育士の免許も取得するということはやはり大変なことだと思います		

（　）内は書かれている趣旨が同じだった人数を示す．何も示していない場合は1人である．

Akita University

がとれるのであれば取りたい，というものである．④は③に対して「保育士になるつもりだから，保育士試験をとるつもりだったから」など，保育者になることを前提に，述べている記述であった．

「興味・関心」もさらに2つに分類される．①の社会的動向には，「幼保一体型施設の増加で，保育士の免許が必要」というような，現在の社会的ニーズや動向に触れている．対して②は「興味がある，関心がある」というように，「なぜ」興味や関心があるかはわからない記述を分類した．「その他」は上述したカテゴリに含まれないものである．

その結果，資格志向については1，2年生も実習後の学生も違いは見られなく，他のカテゴリよりも記述が多い．興味・関心の社会的動向のカテゴリとも関係するが，実習後の学生の方が幼稚園免許との併有について意識していることが伺える．また逆にイメージとしての心地よさは，実習後の学生はあまり記述する者がいなかった．おそらく「子どもがかわいい」などという，職業観から離れた漠然としたイメージは，実習現場の体験によって減少したと思われる．

保育士資格に関する自由記述からみる問題点　質問紙の最後に設けた「保育士資格に関して何か思うことがあれば自由にお書き下さい」という欄への記述を取り上げ，今後の課題を検討する．

1，2年生，実習中の3年生の両者に共通してみられたことは（表6参照），大学での保育士資格取得を望むものである．また，所属にかかわらず誰でも取得できるようにして欲しいと述べている学生もいた．大学での学習に加えて資格試験の受験準備を行わなくてはならない現状を考えると，この希望は必然的であるとも考えられるが，一方では容易な資格取得への要望ともとらえられる．資格と専門性との関連を意識していない傾向に対して，今後の保育者養成教育における，専門性の育成のあり方に対する大きな課題であると言える．

4.　大学における保育者養成の課題

今日，幼児教育の重要性が社会的に認知されてきたのに対し，保育者（幼稚園教諭・保育士）はこれまで社会的に適正に認められてきたとはいえない．先の学生対象の質問紙調査では，短期大学で資格取得可能な保育士養成を4年制大学で行うことへの疑問が挙げられるなど，保育士はもちろん，学校教育である幼稚園教諭も他校種の教員に比較するとその評価が同等であるとはいえない．

これまで述べたように，幼児教育・保育にはその歴史ともかかわる特有の問題や，社会の変化に対応した現代的な課題がある。それらを踏まえ，上記調査に見られた学生の実情も考慮し，今後の保育者養成の課題と重視すべき内容について以下の5項について考察する。

(1)　資格・免許取得への意識

先の調査にみられるように現在の学生には資格や免許に対する強い関心がうかがわれる。この免許・資格取得に対する目的意識は，職業としての保育者への志望から，資格取得自体への希望，また他校種の免許・就職への付加価値としての位置づけなど多様である．これは大学における学習への構え，広く社会の中で幼児教育へ向ける関心，実習など実践的な場への参加姿勢などの面で，大きな違いとなって表れる．先の調査では，実習後の学生で，職業としての保育者への意識より，資格志向が高い傾向がみられた．ここからは，就職が現実的問題となる段階で，本来の志望に付加価値的な意味として幼稚園教諭・保育士の資格を併有しようする意識を読み取ることができる．

このような学生の目的意識の違い，また免許・資格取得に対する動機の多様性を認めつつ，それを通した子どもや保育の理解で基盤となる保育観の育成をめざすカリキュラムの編成を中心とする，計画的な専門性育成が，今後の養成教育の大きな課題である．

(2)　実技・技能の位置づけ

従来，保育現場では，幼児への接し方，話のし方，幼児が喜ぶ遊びの知識や具体的な技能，生活行動の促し方，保育室環境の整美の仕方など，保育者の保育行動に直接かかわる技能的なことが，年長者からの伝達や，実践の試行錯誤の過程での学びとして身につけられ，受け継がれてきた．こうした保育の技能的側面に関しては，学生の関心が高く，大学での筆者らの授業においても実技的内容への要望が高く，実技・実習の授業は出席率も良好である傾向がある．前述の中学生と大学生の意識の比較においては，大学生の「保育者の苦労」に対するイメージは中学生よりも具体的であったが，その多くは幼児への接し方の技能にかかわるものであった．

自分が保育をする場合の不安として，第一に保育

Akita University

技能が挙がることは，経験のない学生にとっては当然のことといえる．また，その職業に独特の技能を身につけることが，自信や職業意識に結びつくと考えることも当然といえよう．

しかし，こうした技能的側面は，前述のように従来から保育者養成教育において重視されてきたことであるが，それは単なるスキルとしてではなく，それが必要とされる状況の理解，幼児の内面を読み取る力や，感性とともにあってはじめて，保育における意味を立ち上がらせると言える．養成教育における，技能的内容の位置づけや，他の学習との関連が今後の課題として挙げられよう．

一方，保育者の専門性にかかわる問題のひとつとして，近年の若年保育者の豊かな遊び体験や生活体験の不足がある．それは先にあげた学生のイメージ画に表された遊びイメージの貧困さからもうかがうことができる．特に遊びの体験不足は，幼稚園教育の中心である幼児が自ら展開する遊びを通した幼児理解に深くかかわることである．体験を通した遊びへの理解や，感性を豊かなものとするために，実践的・体験的学びは今後の養成では，単なるスキルとしての実技中心主義とは異なる目的で必要とされるものであろう．

(3) 保育現場体験の位置づけ

保育現場においては技能の伝達は，年長者からの幼児理解や保育の場の状況の理解を含めた実践知が伝達される．保育者が幼児をよく見て，理解し，かかわり，省察する，主体的に考える営みとしての保育理解が必要であり，先に述べた保育技能もそれによってはじめて生きるものである．

現場での学びの前段階としての学生の教育実習がある．前項の学生の意識調査によれば，1，2年次の学生と教育実習後の学生では，資格取得に対する意識，幼児教育を取り巻く社会情勢などへの関心において，明らかな違いが見られた．また，「子どもがかわいい」などという，職業観から離れた漠然としたイメージは減少している．それらは単に教育実習の体験によるものとはいえない側面もあるが，教育に対しての関心を高めるために，学習間の関連を考慮したカリキュラムの検討が必要であろう．その中では，教育実習やフィールドインターンシップ型授業の位置づけを，実技・実践への学生の強い関心と，**現場での実践知に触れる体験**，理論的な学びとの関連の中で再考することが必要であろう．

(4) 保育・発達の理論や本質的課題についての学びの意味

学生の段階や新任期の関心が技能の習得に集中するとしても，それ以後の保育者としての成長過程においては，自らの保育を「知的行為」として成長させていくことが期待される．津守は，子どもの側に立って行われるときには，保育は他者の立場に立って「自分の向きを変える意志を必要とする」行為であり，自らを相対化する「知的行為」である，と述べている[6]．そしてそれは主に，保育中ではなく，保育終了後の省察や思索の過程で行われる．保育の目的やねらいが，基盤となるものとして理解され，幼児の前で表現されていくようにすることが，「知的行為」としての保育であるといえる．養成過程においては，その基盤となる力の育成こそがなによりも必要とされる．

経験的・実践的学びから，保育を「知的行為」に高める主体的な学びの姿勢には，それを支える理論や思想などが深くかかわる．養成過程において，基本となる理論の習得や，その意味，幼児教育の目的などの本質的課題への関心を育てることが，いうまでもなく以後の保育者としての成長につながるものであろう．この場合，理論や思想は，幼児を理解するための予め設定された枠組みや，幼児の発達を理解するための標準であってはならない．枠組みや標準として持つことは，津守の言う「自分の向きを変える意志」を伴う学び，自らを振り返りつつ幼児を理解しようとする保育の営みにはつながらないからである．

(5) 今日的課題への問題意識

幼稚園教育・保育所の保育ともに，現在の日本においてはその施設のあり方も保育の内容も多様である．新任保育者の中には，養成期に学んだ幼児教育の理論や，そこで形成した幼児教育や保育者に対する理想像と現実とのギャップに悩む例が多く見られる．これには先の学生の保育イメージに対する考察に挙げた，学生自身の幼児教育・保育体験の多様性にもかかわっていると考えられる．

今日にあっては，保育施設自体がその問題を自覚しつつ本来の目的を超えた保護者サービスを提供せざるを得ない例も散見される．保育者は現実に軸を置きながら，その課題に自ら対峙する姿勢がより必要とされる．

また，他者（子ども）の立場から保育の意味を外

Akita University

部に説明，発信していく力も求められる．少子化，過疎化，保育ニーズの多様化などにより，幼児の生活や発達よりも経済効率や保護者サービスを優先させて，幼児教育・保育施設を経営する動きも見られる．こうした状況に対して，保育者に求められるのは，幼児期に必要な生活・発達の保障という立場を外部に説明できる力，それを阻むものに使命感を持って対峙する，しなやかで粘り強い「知的行為」としての働きであろう．そのためには養成段階から，人とのかかわりやコミュニケーション力，主体的に学ぶ力，また共同体の中で学ぶ姿勢，共同体における謙虚さなどを培うことが重要である．

また，先の調査に見られた資格志向，実技志向の強い学生の実情に対して，社会的な関心や幅広く子どもの生活や幼児教育施設のあり方を考える姿勢を育てることが，養成上の重要な課題としてとらえられよう．

さて，近年の幼児教育施設には多様な保護者ニーズへの対応が求められている．そこでは本来家庭で担ってきた役割の施設依存傾向への対応や，親子の生活様式の変化への対応，施設内の保育にとどまらない保護者支援・子育て支援の役割が求められるなど，従来の幼児教育とは異なる，独自の保育のあり方，保育者の役割の探求が必要とされる．

たとえば少子・高齢化の進行が著しい秋田県の場合，幼保の一体的運営や，統廃合，保育所への一本化，私立幼稚園による保育所の同時経営などが，全国的にみても急速に進められている．幼稚園・保育所の枠を超えた広域の保育施設の統合・一体化への動きも著しい．それらは，家庭での生活時間の変化，保育サービスの均質化，保育時間の長時間化，保育者の勤務の変則化とそれによる乳幼児の心の安定への影響など，新たな課題を生み出している[7]．新たな幼児教育施設として総合施設の開設も進められている．総合施設は，それぞれの地域や保護者のニーズに対応して工夫する余地があり，多様であるべきだとされているが，これは「子どもの最善の利益」が最優先されない場合には，保護者や経営側のニーズによってのみ計画される可能性をも含むものである．

こうした時代に，幼児教育・保育を取り巻く社会環境への関心は保育者志望の学生にとって，今後，意図的に身につけなくてはならないことであるといえよう．とりわけ秋田県にみられるような地域特有の課題を理解した上で，他の先行例に倣うだけでない，創造的思考の姿勢を有する保育者の養成が，大学に求められる重要な役割でもあろう．

以上，大学における保育者養成の課題5項目について述べてきたが，特に今後の4年制大学における保育者養成には，幼児教育という狭い枠組みの中のみではなく，多角的に社会や人間，文化などを学ぶ機会と時間を保障するという，短期間の養成では不可能な専門性の育成という役割が認められよう．

また，今日まで大部分が女性によって担われてきた幼児教育・保育を，両性による専門性の高い職業としていくこともまた，4年制大学には期待されよう．伝統的な母性的保育から，両性に開かれた保育を実現するために，男女の別なく養成教育が行われること，またそれを通して従来の母性的保育観の見直しを図ることも大学における養成の可能性であろう．

註

1) 日本保育学会，1977年，『保育学の進歩』フレーベル観，pp. 360-372.

2) キリスト教保育連盟百年史編纂委員会，1986年，『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟，pp. 175-185.

3) 田甫綾乃，2005年，「戦後を幼稚園教諭として生きた女性のライフストーリー」『日本保育学会第58回大会論文集』pp. 254-255.

4) 平成14年度における幼稚園就職者のうち，大学卒1,485名，大学院修了15名に対し，短期大学卒は6,906名，指定養成機関修了者1,134名である．（幼児保育研究改編『最新保育資料集2005』2005年，ミネルヴァ書房，第Ⅱ部 p. 10）．また，平成16年度学校教員統計調査（文部科学省）によれば，管理職を除く幼稚園教員の給料は，公立幼稚園で平均310,700円，私立園では181,700円と大きな格差がある．

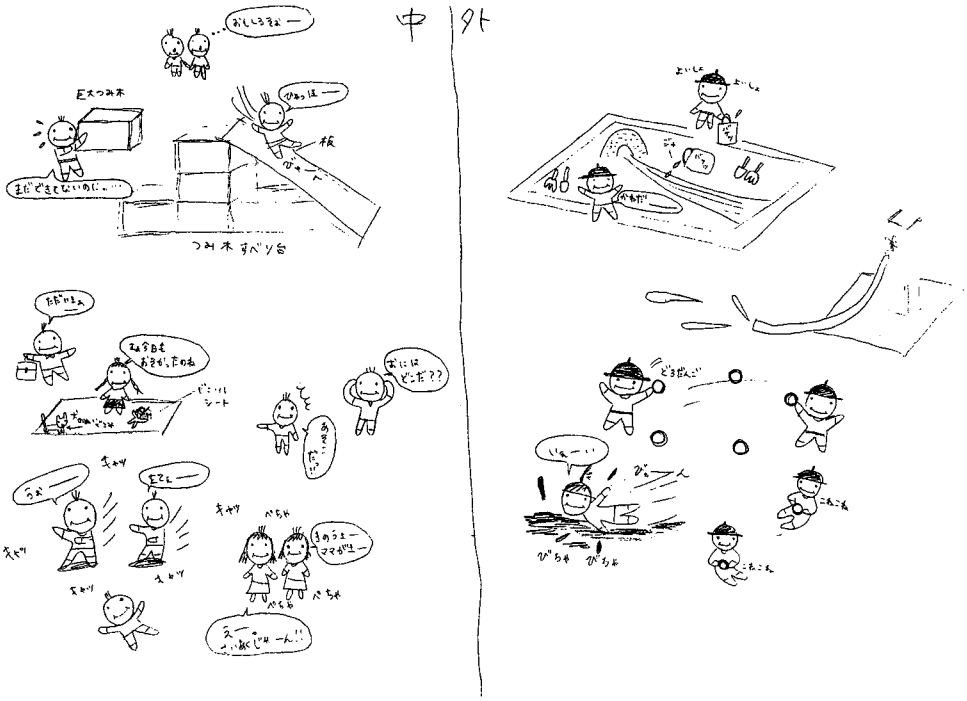
5) 日本保育学会，1997年，『わが国における保育の課題と展望』世界文化社，pp. 332-342.

6) 津守真，1997年，『保育者の地平』ミネルヴァ書房，pp. 216-217.

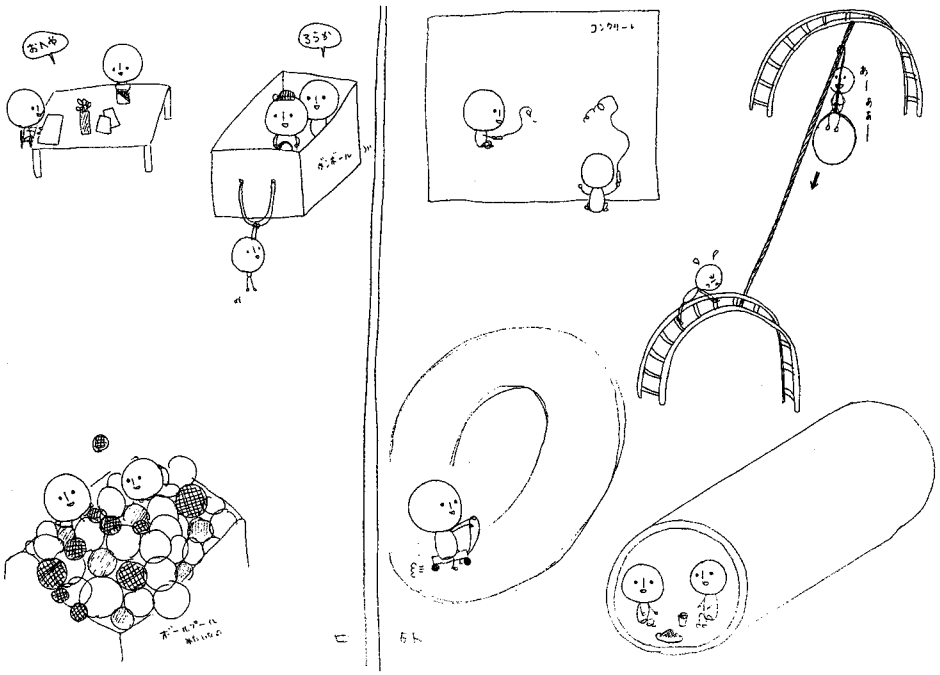
7) 安藤節子・奥山順子他，2002年「日本保育学会共同研究委員会地域の実態研究委員会最終報告－秋田地区の実態－」『保育学研究第40号第2巻』pp. 176-186.

Akita University

資料１　自由遊びをイメージした絵の典型例

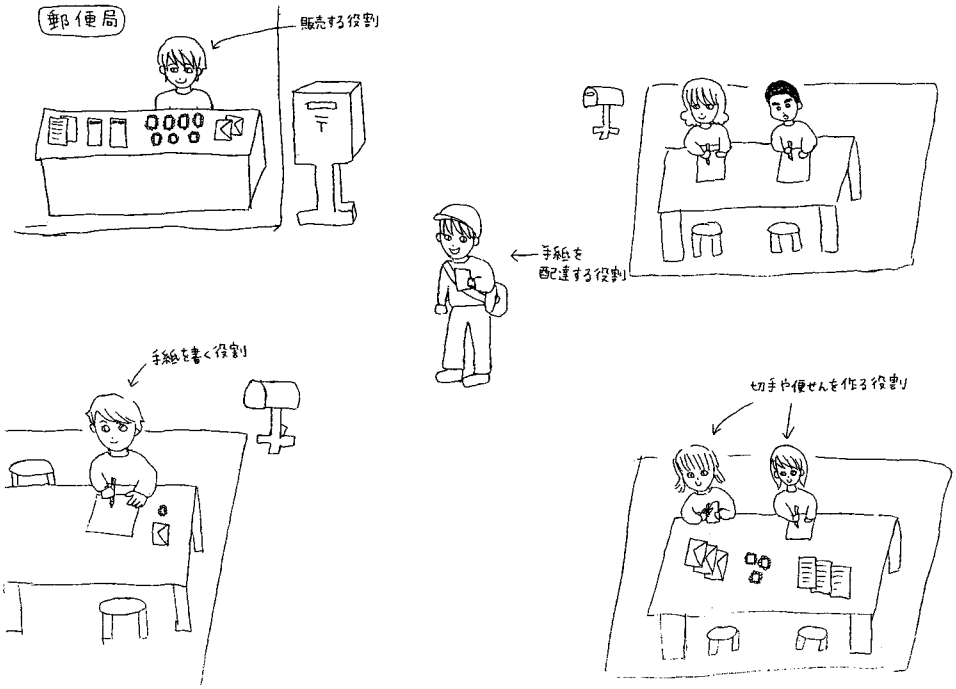


資料２　遊びと「もの」とのかかわりをイメージした絵の典型例

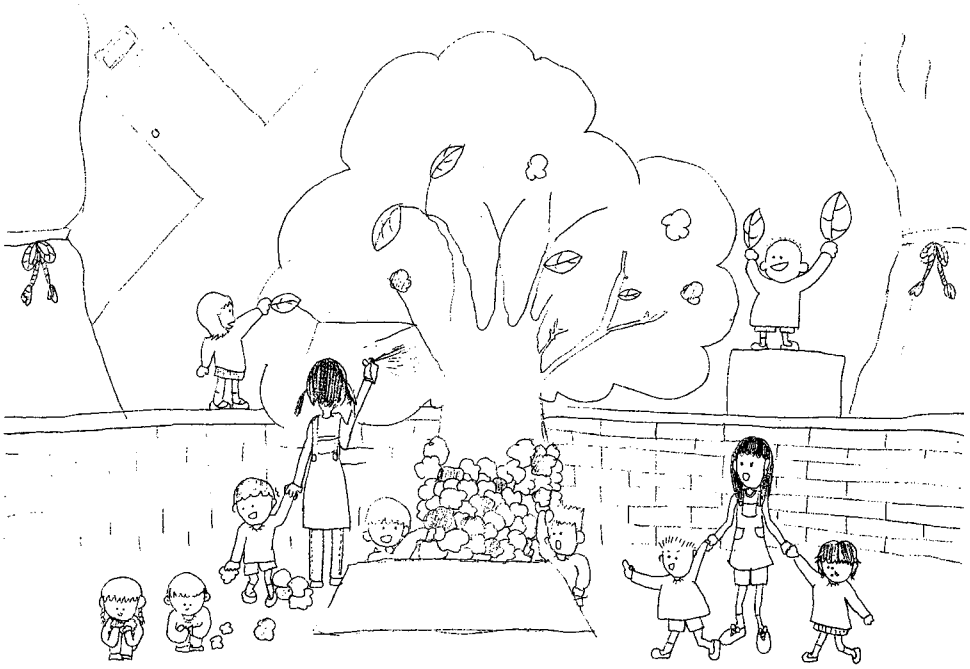


Akita University

資料３　保育者が場所を設定しているイメージの典型例

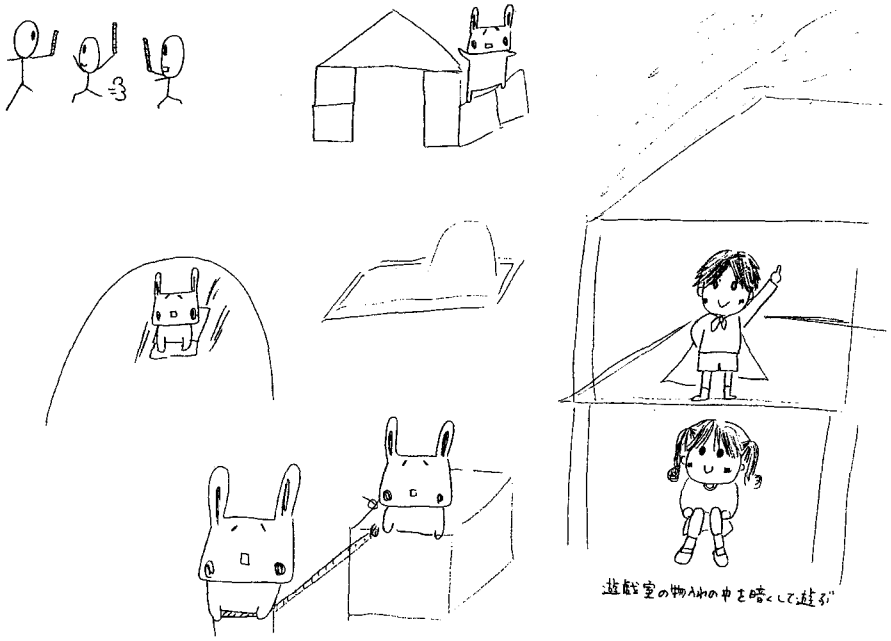


資料４　保育者の「子守的」な役割をイメージした典型例



Akita University

資料5　その他



Summary

The present paper argues for the importance of a pre-service training course for child care workers at university level education. The importance of such a course has long been recognized, but its content has been problematic, in that over-reliance has been placed on developing practical skills without giving due attention to a conceptual framework. The knowledge should be needed particularly for novice trainees, who are very likely to enter the field where they have to solve a variety of problems on their own initiative. The paper claims that trainees should be capable of understanding various issues regarding child care in a broader social context, for which purpose a wider variety of specialized knowledge and skills will be required.

Key Words : Early Childhood Education and Care, Specialization of Nursery School and Kindergarten Teachers, The Training for Kindergarten Teacher at University, Intellectual Deed

(Received January 23, 2006)